

あ と が き

「研究は、過程が大切だというが、成果はそれ以上に大切である。よい研究過程であれば、よい成果が得られる。」と言われます。

私たちは、平成16年度を境に、総合的な学習領域としての「みらい」中心のカリキュラムから、各教科学習中心の研究へとバトンを繋いできました。

まず、研究を進めるに当たり、教師の授業力・指導力を磨くことに力を入れ、全員が校内研究授業を実施し、1授業について事前・事後協議を行ってきました。

さらに、「夏季教科別研修会」を実施し、県内外の先生方と教科指導のあり方を論じ合うと共に、本校の教科指導の見方・考え方を知っていただく機会をもってきました。そして3年目、本年度の「教育研究発表会」には、600人近くのご参加を得、貴重なご意見・ご示唆をいただきました。おかげをもちまして、子どもたちも・教員も大きな感動を覚え、使命を再認識いたしました。たくさんの目によって育てられていることを私たちは、今、実感し感謝しております。

さて、本年度は、「意味と内容」がひろがる学びの創造の3年次として、『互いのまなざしが響き合う学習』を研究主題に、「一人一人への確かなみとりと支援によって」というサブテーマを設定し、研究を進めてきました。

当然なことですが、私たちは、今、あらためて子どもたちの興味・関心や学習のこだわりを大切にしながら子どもに寄り添い、どのような「まなざし」をもって学習に臨んでいるかをみとり、単元構成し、学習計画を立てるなど支援していくことが大切だと考えています。それは、互いが自分の「まなざし」に友だちの「まなざし」を重ね合わせて、ともに高まっていく学習を目指すと共に、協同的な学びの集団をつくっていきたいという思いがあるからです。

例えば、算数科では、その「まなざし」がよりわかりやすい形で表出し、よりの確に捉えられ響き合うために、思考の「ずれ」に目を向け、自分の考えと友だちの考えの比較にポイントを置き、気づきを共有していく学習を構成しています。「問い」から「答え」への直線的で単調なやりとりではなく、縦にも横にも網目のようにつながる学習を目指しているのです。

私たちの願いは、「自己実現を目指す人間」の育成にあります。子どもたちには、互いの「まなざし」を擦り合わせ、聞き合い、学び合い、磨き合う過程を通して、創造的な思考を働かせたり、豊かに表現しようとしたり、的確な判断をするなど主体的な能力が養われることになるでしょう。

特に本年度は、佐藤学先生のご講演の機会を得、私たちの研究推進に対する構え・附属校のあり方や学びの成立などについても、たくさんのご示唆をいただきました。来年度は、協同的な学び、同僚性についても直接ご指導いただけるということをお聞きしました。大変ありがたいことです。今後さらに子どもにとって充実した高い学びへと進められるよう実践研究を深めていきたいと考えます。

本年度、子どもたちの「学び」を中心にすえ、迷いつつ歩んできた一端が、本紀要です。本校の研究理念や歩み、さらに教員一人一人のこだわりや主張点を感じていただければと願います。ご一読いただき、ご教示いただければ幸いです。

副校長 北 島 健 司